様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １２ 日現在

機関番号：１７６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2022
課題番号：１６Ｋ０３１１７

研究課題名（和文）ブルゴーニュ移動宮廷と在地社会をめぐる比較・交流史的考察

研究課題名（英文）Studies on the Burgundian Itinerant Court Interacted with the Local Societies

研究代表者
中堀　博司（NAKAHORI, Hiroshi）

宮崎大学・教育学部・教授

研究者番号：９０４２３５５８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：中世後期の独仏間地域に形成されたブルゴーニュ公国は、約一世紀に及んで栄華を誇り、この移動宮廷は当時の国際舞台のなかで傑出した存在感と影響力を示すとともに、その後のヨーロッパ諸国における宮廷文化の基礎を築いた。本研究では、主にフランス、ベルギー、オランダの各国各地に分散するこの宮廷の痕跡を、文献・図像資料、現存遺構、考古学遺跡等から具に追跡し、同宮廷の在地社会とのかかわりや国際交流の諸相を体系的に明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ブルゴーニュ宮廷の空間とそこでの日常について、古今における現地の様子を伝える図像・画像等を交えた総合的な書物は未だ著されておらず、現在の独仏間各地で個別分散的に取り組まれているに過ぎない。それらを歴史学・美術史・考古学等の知見を駆使して、国際色豊かな学際的成果として提示すること、また、今盛んな文化財保護やツーリズムの成果をも汲み取って確かな研究成果を一般の人々にも向けて発信することに学術的かつ社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：During the later Middle Ages, the Burgundian state, formed between the Holy Roman Empire and the realm of France, flourished for about a century. This itinerant court demonstrated outstanding presence and influence in the European scene, and moreover created the foundation of the courtly culture in the modern period. In this research, we carefully pursued the trace of this court, dispersed mainly among France, Belgium and Netherlands, through the documents and iconography, the old buildings (or their remnants) and the archaeological ruins, and then elucidated both its interaction with the local societies and various phases in the international exchange.

研究分野：人文学

キーワード：西洋史　宮廷　ブルゴーニュ　中世　比較・交流史

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1)　前近代ヨーロッパの宮廷については近年盛んに論じられてきたが、ここで対象とするのは、フランス中東部地方を根拠地としたブルゴーニュ公の宮廷である。現在のベネルクスにまで勢力を広げたブルゴーニュ公国は、当時のヨーロッパにおいて多大な影響力を有したが、1 世紀ほどで瓦解し、その遺産の一部はハプスブルク家へと引き継がれた。その結果、ヨーロッパ各地の宮廷文化に重要なモデルを提供することになった。

(2)　しかし、現代の国民国家には直結せず、その痕跡も各国各地に分散してしまったため、豊富な史料が伝来するにもかかわらず、基本的に研究は個別分散的に行われてきた。1980 年代以降、同宮廷の研究は W.パラヴィッチーニを代表とする在パリ・ドイツ歴史研究所グループによって一時盛行したが、現在は研究もやや低調気味の状況にあり、改めて包括的な宮廷研究が望まれている。

２．研究の目的

(1)　それでは、ブルゴーニュ宮廷はどのように移動し、どこに滞在し、そこでどのように生計を営んだのか。そして在地社会とどのように交わり、どのような影響を及ぼしたのか。現存する国民国家のかつて以上に活気づく首都だけを取り上げれば、主要都市の歴史としてこれまで度々研究の対象とされてきた。しかし、既に歴史の彼方に消滅した国家とあっては、事はそう単純ではない。

(2)　そこで本研究は、各国各地に分散するこのブルゴーニュ移動宮廷の所在を、文献史料はもとより、図像資料、現存遺構、考古学遺跡等から体系的に明らかにするとともに、宮廷所在地における宮廷の在地社会とのかかわりと国際交流の諸相を比較・交流史的に考察することを目的とする。

３．研究の方法

(1)　ブルゴーニュ宮廷の痕跡を踏査し、各種史資料と現状の画像を用いて同宮廷を在地社会との相互交渉の中に甦生させることを目指す本研究において、移動宮廷の所在、具体的な調査対象、収集すべき史資料は以下の通りである。

(2)　主たる対象国は、フランス、ベルギーおよびオランダであり、宮廷所在地のみならず、その他の移動経由地、訪問先、戦場となった場所にも注目する。対象となる都市は、ブルゴーニュ公が領有した各地方（旧諸侯領・領主領）の中心都市が第一に挙げられるが、経由地や戦地、司教座都市など例外もある。

(3)　都市空間全体が調査の対象と言えるが、ブルゴーニュ公の居城および宮廷に付随ないし密接にかかわる教会・修道院あるいは貴族の私邸がまず挙げられる。しかし、それらが当時のまま残されることはほぼないため、各都市の図書館、文書館、美術館、考古学博物館等における、図像や古地図、歴史書等の探索が前提となる。19 世紀に文化財保護が活発化して以来の、各地の地方雑誌に掲載された論考や郷土史的な書籍はかなり重要である。こうして本研究で踏査する主要都市は、ヘント、ブルッヘ、イープル、リル、ドゥエ、ブリュッセル、メヘレン、デン・ハーフ、サン=トメール、ヴァランシエンヌである。

(4)　以上をもとに広域に及ぶブルゴーニュ宮廷の活動空間・場とその変遷を半ば視覚的に調査することで、そこで日常的に繰り広げられた生活文化、祝祭や国際的な芸術・文化交流を浮彫にするとともに、その現在における歴史的・文化的意義を再評価する。

４．研究成果

(1)　ブルゴーニュ公国の支配領域ないし近接する都市について、「領邦中心都市」、「会計院所在地」、「金羊毛騎士団総会開催地」、「（影響下の）司教座」の 4 つの指標から、全体像を示した論考を作成したのち、下記の各都市で文献・図像資料、現存遺構および考古学遺跡を踏査した。関連建造物・史跡のほか、各都市で行われた宮廷催事（入市式、結婚式、金羊毛騎士団総会、馬上槍試合等）や城館工事にかかわる会計史料、古地図、絵画、あるいはガイドやパンフレットまで多種多様な史資料を収集した。

(2)　こうして研究代表者および研究協力者は、フランス、ベルギーおよびオランダにおける主要都市①ヘント、②ブルッヘ、③イープル、④リル、⑤ドゥエ（以上、フランドル地方。以下同様）、⑥ブリュッセル、⑦メヘレン（ブラバント地方）、⑧デン・ハーフ（ホラント地方）、⑨サン=トメール（アルトワ地方）、⑩ヴァランシエンヌ（エノー地方）に加え、⑪スライス、コルトレイク、アールスト（フランドル地方）、⑫ミッデルブルフ、ジーリクゼー（ゼーラント地方）、

⑬アムステルダム、ホルクム（ホラント地方）の二次的関連都市や、第 2 代ジャン無畏公および第 4 代シャルル突進公の各死没地⑭モントロ（イル=ド=フランス地方）および⑮ナンシィ（ロレーヌ地方）を踏査し、ブルゴーニュ宮廷の痕跡のほぼ全容を明らかにした。今後、これらの都市における宮廷やブルゴーニュ宮廷史に不可欠な諸事件をめぐる在地社会とのかかわりを取り上げ、詳述したものを公刊する予定である。

(3)　主たる調査の対象をより具体的に述べれば、以下の通りである。なお、本研究期間以前に既に情報を収集していたディジョン、パリ、アラス等はここに含まれていない。

①　ヘント：シント・ヤン教会（現シント・バーフ司教座聖堂、金羊毛騎士団総会［＝TO］会場）、ホフ・テン・ワレ（フランドル伯邸）遺構、シント・ピーテルス修道院（現博物館、君主の宣誓場所）、フランドル伯城（現博物館）、金曜広場（祝祭・反乱の舞台）。

②　ブルッヘ：オンゼ・リーヴェ・フラウ教会（シャルル突進公とその娘マリの墓廟、TO 会場）、シント・サルヴァトール教会（現司教座聖堂、TO 会場）、ブルフ広場（シント・ドナース教会跡）、市庁舎、旧ブルフセ・フレイエ（ブルッヘ農村地区）役所（現文書館）、マルクト広場（祝祭・反乱の舞台）、プリンゼンホフ跡（現ホテル）、フルートフーズ邸（現博物館、公側近の館）、市門。

③　イープル：毛織物ギルド会館・市庁舎遺構（現博物館。建物は現代の復元）、リル門（中世市門遺構）、フランドル伯邸跡。

④　リル：リウル宮（のち市庁舎）遺構（現観光案内所。礼拝堂のみ現存）、ラ・サル館（フランドル伯邸）跡（TO・「雉の誓いの宴」等会場）、ノーブル・トゥール（中世市壁塔遺構）、リル会計院跡、オスピス・ガントワ（現ホテル、施療院）。

⑤　ドゥエ：市庁舎・鐘楼、フランドル伯邸（のちカノン砲鋳造所）跡、サン・タメ参事会教会跡。

⑥　ブリュッセル：クーデンベルフ宮跡（現王宮およびロワイヤル広場の地下遺構）、サント・ギュデュル教会（現サン・ミシェル・エ・ギュデュル司教座聖堂、TO 会場）、ラフェンスタイン領主邸（現私邸、ブルゴーニュ公親族・側近の館）、テルビューレン（現公園、ブラバント公城館・狩猟場跡）。

⑦　メヘレン：シント・ロンバウツ教会（現司教座聖堂、TO 会場）、市庁舎、参審人館（メヘレン高等法院所在地）、市門。

⑧　デン・ハーフ：ビンネンホフ（現オランダ国会議事堂、ホラント伯邸、特に「騎士の館」）、シント・ヤコブ教会（TO 会場）。

⑨　サン=トメール：サン・ベルタン修道院遺構（TO 会場）、サン・トメール参事会教会（現ノートル・ダム司教座聖堂）。

⑩　ヴァランシエンヌ：ドミニコ会サン・ポル修道院跡（TO 会場）、エノー伯邸跡。

⑪　スライス、コルトレイク、アールスト：鐘楼、市門・城砦跡、ベギンホフ。

⑫　ミッデルブルフ、ジーリクゼー：市庁舎（博物館）、市門・市壁跡。

⑬　アムステルダム、ホルクム：市門・城砦跡。

⑭　モントロ：ノートル・ダム教会（ジャン無畏公の一時的な遺体安置場所）、ヨンヌ川にかかる橋（ジャン無畏公殺害場所。現在の橋は現代の建造物）。

⑮　ナンシィ：ロレーヌ公邸（現博物館、シャルル突進公を一時埋葬した隣接するサン・ジョルジュ参事会教会およびコルドリエ教会を含む）、ブルゴーニュ十字架広場（シャルル突進公推定死没地）、聖ヨハネ騎士団コマンドリの塔遺構（かつて周辺にはサン・ジャン潟があり、公シャルルはこの付近に布陣・戦死）。

(4)　1473 年、ドイツ西部モーゼル河畔に位置する古都トリーアにおいて、シャルル突進公と神聖ローマ皇帝フリードリヒ 3 世の間で、両家の結婚および前者の国王戴冠をめぐって、世紀の会談が行われた。同公が佩用した「帽子」の意味するところと、同公に関する表象の変化における同会談の意義について、同公の移動宮廷の一連の動きの中で明らかにした。シャルル突進公は、

トリーアで王冠を得るには至らなかったが故に、その後宮廷が移動した各地で、その真珠・宝石を鏤めた豪華な「帽子」は、益々「王冠擬きの帽子」として人々の目に映ったのである。

(5)　ブルゴーニュ公が北方の領土の重要な拠点とした都市リルで、第 1 回金羊毛騎士団総会や名高い「雉の誓いの宴」のほか、宮廷貴族の結婚式など数々の宮廷催事が行われたが、その舞台はフランドル伯邸のラ・サル館であった。実は、その所在地はこれまで半ば不明のままであった。というのも、第 3 代フィリップ善良公が 1453 年から新たにリウル宮を建設した結果、旧いラ・サル館は都市に譲渡されたのち 1520 年代には廃棄されたからである。先行研究における問題を整理しつつ、ラ・サル館が、サン=ピエール教会跡（現リル芸術学校および裁判所）とオスピス・コンテス（現博物館、ノートル・ダム施療院）の間に立地したことを確認した。また、ここで初めて集結した金羊毛騎士団がハプスブルク家へと伝わり、六百年弱の歳月を経ながらも現代スペインの公式の勲章制度となり、その結果、わが国の天皇家も宮廷外交の中で代々その頸飾を受勲されるに至ったことを明らかにした。

(6)　ブルゴーニュ公が屡々滞在した都市ブルッヘについては、断片的ではあるがぶどう酒贈与帳簿が伝来しており、都市からぶどう酒が贈与された日時、対象者や贈与量を知ることができる。まず帳簿の残存する 1424-26 年度分の分析を通じて、フィリップ善良公治世初期において公と側近、役職者や外国使節などさまざまな人々がブルッヘに滞在し、都市の贈与の対象になっていたことが明らかになった。次に、1468-69 年度分の分析を通じて、シャルル突進公治世当初においては都市がブルゴーニュ宮廷への仲介者に定期的にぶどう酒贈与を行うことにより、先行する時期よりも宮廷との関係を強めていたことを明らかにした。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　6件）

１．著者名 中堀博司	４．巻 34
２．論文標題 ブルゴーニュ宮廷史関連史料について―フランス地方文書館点描―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 宮崎県地域史研究	６．最初と最後の頁 17-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 中堀博司	４．巻 37
２．論文標題 （研究大会報告概要）雉の誓いの宴（1454年）はどこで催されたか	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日仏歴史学会会報	６．最初と最後の頁 38-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 畑奈保美	４．巻 24
２．論文標題 15世紀フランドル都市ブルッヘのぶどう酒贈与とブルゴーニュ宮廷―1468-69年の贈与帳簿より―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 ヨーロッパ文化史研究	６．最初と最後の頁 95-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 中堀博司	４．巻 98
２．論文標題 天皇家をめぐる宮廷外交の一側面―金羊毛勲章とガーター勲章―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 宮崎大学教育学部紀要	６．最初と最後の頁 51-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 畑奈保美	4．巻 996
2．論文標題 （書評）青山由美子『11～12世紀のフランドル伯の尚書部』	5．発行年 2020年
3．雑誌名 歴史学研究	6．最初と最後の頁 46-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中堀博司	4．巻 266
2．論文標題 （書評）金尾健美著『15世紀ブルゴーニュの財政―財政基盤・通貨政策・管理機構―』	5．発行年 2018年
3．雑誌名 西洋史学	6．最初と最後の頁 96-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中堀博司	4．巻 89
2．論文標題 ブルゴーニュ公国と諸都市―移動宮廷とそのモニュメントをめぐる試論―	5．発行年 2017年
3．雑誌名 宮崎大学教育学部紀要（社会科学）	6．最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 畑奈保美	4．巻 19
2．論文標題 15世紀フランドル都市ブルッヘのぶどう酒贈与帳簿―フランドル都市とブルゴーニュ宮廷の関わり―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 ヨーロッパ文化史研究	6．最初と最後の頁 97-114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 中堀博司	4．巻 8
2．論文標題 シャルル・ル・テメレールの「帽子」と国王戴冠の行方	5．発行年 2016年
3．雑誌名 西洋中世研究	6．最初と最後の頁 26-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 畑奈保美
2．発表標題 15世紀フランドル都市ブルッヘの客人接待―1468-69年度のぶどう酒贈与から―
3．学会等名 社会経済史学会九州部会7月例会
4．発表年 2022年

1．発表者名 中堀博司
2．発表標題 雉の誓いの宴（1454年）はどこで催されたか
3．学会等名 日仏歴史学会第10回研究大会
4．発表年 2022年

1．発表者名 畑奈保美
2．発表標題 ブルゴーニュ公とホラント・ゼーラント
3．学会等名 第21回ブルゴーニュ公国史研究会
4．発表年 2019年

１．発表者名 中堀博司
２．発表標題 ブルゴーニュ都市は今―ハンザ史研諸氏の近著に寄せて―
３．学会等名 日本ハンザ史研究会第32回研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 畑奈保美
２．発表標題 都市のぶどう酒贈与―15世紀都市ブルッヘの事例より―
３．学会等名 比較都市史研究会第461回例会
４．発表年 2018年

１．発表者名 畑奈保美
２．発表標題 ブルゴーニュ公国のフランドル貴族ユーグ・ド・ラノワをめぐって
３．学会等名 第20回ブルゴーニュ公国史研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 中堀博司
２．発表標題 1473年トリーア会談再考
３．学会等名 平成29年度九州史学会大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 畑奈保美
２．発表標題 15世紀フランドルの対イングランド政策における君主・都市・貴族―1430年代ユーグ・ド・ラノワの意見書より―
３．学会等名 比較都市史研究会第452回例会
４．発表年 2017年

１．発表者名 畑奈保美
２．発表標題 都市ブルッへのぶどう酒贈与について
３．学会等名 第19回ブルゴーニュ公国史研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 中堀博司
２．発表標題 ブルゴーニュ宮廷のモニュメント再考―ブルゴーニュ移動宮廷と在地社会をめぐる比較・交流史的考察―
３．学会等名 第17回ブルゴーニュ公国史研究会
４．発表年 2016年

１．発表者名 畑奈保美
２．発表標題 フランドル貴族Hugues de Lannoyと『ブルゴーニュ公への建言』（1439年）
３．学会等名 第17回ブルゴーニュ公国史研究会
４．発表年 2016年

〔図書〕　計1件

１．著者名 川成洋、菊池良生、佐竹謙一、青谷秀紀、河原温、加来奈奈、中堀博司、畑奈保美（他）	４．発行年 2023年
２．出版社 丸善出版	５．総ページ数 792
３．書名 ハプスブルク事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	畑　奈保美 (HATA Naomi)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関